

# ヤミ族の子供の問題

## から学ぶこと

乾 淑 子

近年、低開発国への援助等の問題が、一般の耳目をも集め、それに関する論議も活発になったのは、好ましいことです。そしてそれらの論議のほとんどは、純然たる好意から発したものであるにもかかわらず、私には、どこか釈然としないものが感じられるのです。

それらの論旨の第一段階は、困っている人達には与えるべきだというものであり、第二段階は、実効の上がる与え方を工夫して与えるべきだ、第三段階は、彼らから私達が奪ってきた歴史を思えば、与えるのは当然だ、とだんだんと与えられる側の立場や問題について深く考慮してきていることは確かです。しかし、どこまで行っても、与える私達と、与えられる彼らという図式がついて廻っているように思われて、私には納得がいかないのです。

異質の文化を持つ者同志が接触すれば、そこには必ず何らかの形でのカルチャーショックがあるわけで、それは決して一方的なものではなく、相互に目に見えないショックの行き来が往復し合うのではないのでしょうか。私

達が「与える」時には、私達もまた「与えられている」ものが沢山あるはずです。そのことを忘れて「与える」立場だけに立ってものを考えるのは不遜な行為のように思われてなりません。

私は以下で、台湾のヤミ族の子供に関する問題のいくつかを語ろうと思うわけですが、このような文化人類学的考察においても、単に彼らの文化を調べ、記録し、保存するという意義だけでなく、彼らの文化を知ることによって、私達が教えられるものを考えながら、筆を進めたいと思います。もちろん、私の考察が正しいとはいえない点もあるかもしれませんが。それについては改めて御指摘をいただき、考えるよすがとしたいと思います。

◆ ◆ ◆  
さて、ヤミ族とはどんな人達かと言いますと、台湾の南東の離れ小島に住む人口二七〇〇人ほどの少数民族です。台湾本島の原住民達と違って、漢化される機会が少なかつたものですから、現在でも比較的古い生活形態

が残っていて、文化人類学者達には格好のフィールドです。中でも日本人研究者達にとっては、彼らが日本語を話せる（日本領時代の学校教育の成果というわけです）ので、とても都合がよいのです。

子供の問題を考える順序として、最初に来るのは、まず、子供が生まれるか否か、ということでしょう。素朴な民族の常として、ヤミ族も豊穰と多産を願います。不妊は深刻な不幸の一つであるわけです。しかし、日本の私達の社会と違って、その問題への対処は実に合理的です。結婚して、二―三年たっても子供に恵まれなければ、別れて、新たな結婚相手を求めるのが普通のこととされているのです。

現代の医学的統計においても、夫婦一〇組（妊娠を望むカップルのみを対象として）のうち一組は不妊であり、その三分の一は女性の側の肉体的上の問題、三分の一は男性の側の問題、残りの三分の一は頸管粘液不適合などの特定の相手に対する不妊と、肉体的欠陥は認められない原因不明の不妊とされています。つまり、不妊に悩

む三カップル計六人の男女のうち、四人までは、相手を替えさえすればたぶん子供には恵まれるわけです。ですから、ヤミ族のような判断で、三分の二の人が救われるのですが、それをそのまま、今の日本の社会に取り入れるというのではありません。

日本ではまず、生涯に一人の相手を守ることが美德とされる風習があり、又、女性にとっては生活の保障としての結婚という意味もあります（その是非は、この際問わないこととして）。ヤミ族のように離婚と再婚が社会的に不名誉ではないという状況や、女性は自分の田畑を母親から相続しており、経済的に自立しているという背景がない限り、難しい問題です。

しかし、私が彼らに学ぶべきだと思うのは、子のない夫婦の離別に際しての彼らの表現です。それは「運命が悪いから別れる。」という言葉であり、その言葉を生む考え方です。彼らにとって離別は、決して「三年子無きは去る。」といった一方的差別感に基くものではなく、男女どちらが悪いのでもない、運命が悪い、という解釈なの

です。可能性から言えば、既述の現代医学的な立場からも公平で科学的な判断といえましょう。更に一歩進めて考えれば、例え、現代医学的手法によって両性が検査を受け、どちらかに原因があると判明したとしても、だからといってその人に責任があるというべきではないでしょう。（医療の現場において、気安く、「責任」という表現が用いられるのに、心寒い思いをしたのは、私人ではないと思います。）その人も「生めない」という運命を持っているだけなのです。ヤミ族の考える通り「運命が悪い」のです。

更に、三回、四回と結婚を繰り返すうちに、どうしても子供を持ってない男。女もいて、彼らは徐々に子を持つことをあきらめていくわけですが、それは、本当に運命だという深いあきらめです。このあきらめもまた、私達が学ぶべきものの一つではないでしょうか。

現在の不妊治療には、まだまだ危険な冒険的要素が多く含まれています。排卵誘発剤によって生んだ双子の両方が知恵遅れであることを知った時の母親の嘆きや自責

などを耳にして、恐しい思いをしたことがあります。幸運にも健全であった五つ子や四つ子がもてはやされる陰には、このような不幸な試みもあったことを無視してよいものでしょうか。拙速よりも、巧遅の道を選ぶべきだという判断に、私も組するものです。

人口の増加や働く女性の増加に伴い、自ら生まぬことを選び取るカップルさえある現代なのですから、子が授からぬも運命として、それなりに人生を充実させる方途を求めるのは、さほど難しいことではないような気がします。



さて、無事に子供が生まれると、親は子に名をつけるわけですが、第一子が誕生すると、父母はそれ以前の名を捨てて、その子の父を意味する「シャマン○○」、母を意味する「シナン○○」と呼ばれるようになります。

(孫が生まれると、祖父母は共に、シャブンです。) こういう呼び方は、程度の差こそあれ、どの民族でも用いら

れています。ただ、それが社会的に正式な名である場合を、文化人類学上はテクトノミーというのだそうです。

私が五九年に、ヤミ族のある村を訪れた時、近所のおばさん達が大声でおしゃべりしていました。

「あそこに来た娘は誰なの？」

「いや、あれはシナンタオだよ。」

それは、つまり、私共にはタオという名前の子供がおりまして、私の夫はその村ではシャマンタオと呼ばれていました。ですから、初めて見た私を何という名の娘かと尋ねたおばさんに対して、もう一人が、シナンタオだと答えると、ああ独身の女ではなくて、あのシャマンタオという日本人の妻なのか、と了解されたわけです。

このような生涯に二度、三度と変えざるを得ない命名は、私達のような社会の中で仕事を持つ人には、不便極まりなく、とてもここから学ぶものなどなさそうに思えるかもしれません。しかし、少なくとも父や夫の名を冠して孝標の娘とか、道隆の妻と言われるよりは、明るく開かれた社会における命名だといえそうです。父や夫の

権勢によって背較べさせられているような名より、子によって親にでもらったという自覚を促してくれそうな名の方が、私には好ましく思えるのです。そして、ヤミ族の名が生涯の途中で変わることに不便を言うのなら、結婚によって姓を変えさせられる有職婦人の不便さをも男性諸氏に想像していただきたく思います。



さて、子供が順調に育っていくために不可欠なのは、栄養です。本来、子を産んだ女なら、ほとんどすべてが母乳を出せるはずなのに、新生児と母親が隔離される病院出産のあり方や、バストラインの方を重く見る母親の出現によって、現在の日本では半数ほどの赤ちゃんが粉ミルクを飲んで育っています。その一方で母乳を再評価しようという近來の動きの中で、粉ミルク消費量の上昇をあきらめざるを得ない乳業メーカーは、発展途上国に販路を求めました。その結果、ヤミ族にも最近では、粉ミルクを飲まされる赤ちゃんが沢山います。五六年春に私

が初めてヤミ族の村に泊った時にはほとんど見られなかった哺乳瓶が、五九年秋には、かなりの家庭で使用されていたのです。

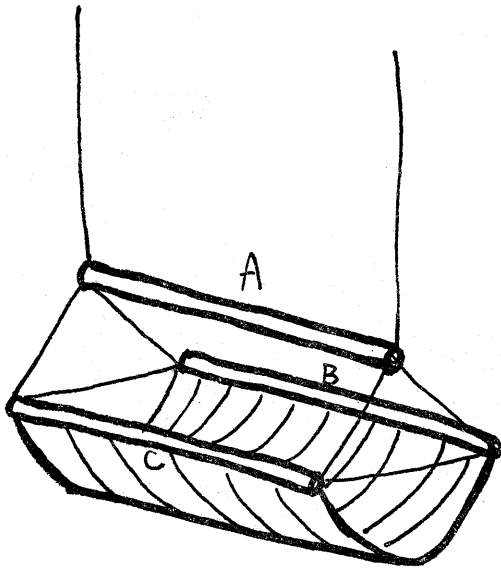
そこで問題になるのはその衛生管理です。現金収入が少ない彼らにとっては高価なミルクですから、赤ちゃんが飲み残しても、捨てるのか、代りに誰かが飲んでしまうというようなことは、一応指導されても実行に移せることではありません。その結果、赤ちゃんは半分腐りかけたようなミルクでも、もったいないから、飲まされるわけです。私も実際に、三十度の気温の中で、四時間ほど放置されていたミルクを飲ませてしまったのを見ました。こういうことは、本当に乳業メーカーに反省していただきたいと思います。本来不必要だったものを無理に持ち込んでニーズを作り、消費させようというのは、結果的に相手を傷つけるだけなのですから。

しかし、こういう販売方法に対して疑問を一度持てば、実は私達自身もそのようにしてものを買わされていることに気づきます。テレビのコマーシャルしかり、訪

問セールスマンしかり、もちろん日本の赤ちゃんが粉ミルクを飲むに至った事情もしかりです。恐しいことに、もう日本人の女性の半分は、母乳が出ない体にされてしまったのです。人の体の機能は、使われなければ退化していくという法則にのっとって考えれば、こういう状況を三〜四世代続けて、母乳の出る女性が稀少な存在になった頃、戦争や災害などで粉ミルクが手に入らなくなつたとしたら、赤ちゃん達は飢えて死ぬ他ありません。種としての人類の生存の問題に関わるかもしれないのです。日本ではすでに、粉ミルクを飲んで育つた世代が出産、育児を経験するようになっていきます。母乳を飲まなかった女の子が母親になった時に母乳を出せる割合がどのくらいなのか、統計をとってみれば、対象群とは有意の差が表われるのではないかという気もします。



赤ちゃんの育児に関して、近代的文明の持ち込んだもう一つの弊害に、頭がいびつになってしまふ、というこ



とがあります。ヤミ族には、もともと図1のような形の揺りかごがありました。BとCの二本の棒の間に張られた布の上に赤ちゃんを寝かせておき、Aの棒を持って揺ると、赤ちゃんは眠ります。この揺りかごと赤ちゃんは左右どちらにも傾きようがないのですから、頭がいびつになるという心配は、本来ヤミ族にとって考えられなかったことです。

ところが最近、台湾本土から買ってくるようになった図2のような揺りかごに赤ちゃんを寝かせることがはやり始めました。これはぐるっと一周して折れ曲った金属のパイプの間に布を張ったもので、Aの部分を押し下げることによって、赤ちゃんは上下に揺られて気持ちよく眠るしくみです。これだと、赤ちゃんによっては、左右どちらかに首を傾げる癖のつくこともあり、頭がいびつになってしまいます。日本の赤ちゃんでも平らな所に寝かされていて、頭がいびつになってしまうのはよくあることです。しかし日本では、それなりに癖を矯正する方向から採光するとか、人があやしかけるとか対策が講じ

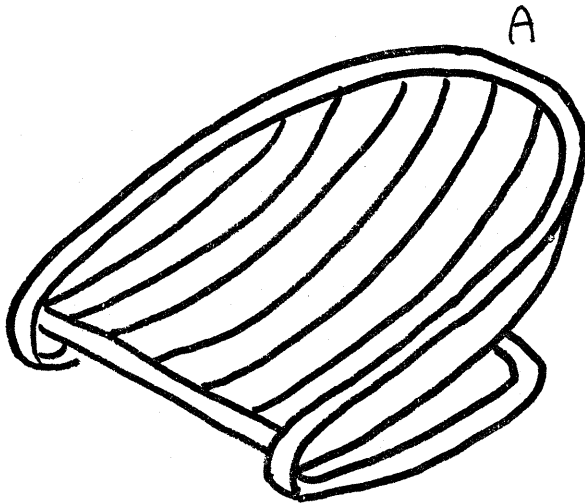


図 2

られています。ヤミ族には元来そういう悩みはなかったもので、対策を知りません。一つの文化の体系に新しいものが加わっていく時には、それに伴う諸種の問題への対応も、共に入れていかなければならないということ、よく考えるべきでしょう。

ついでに言えば、図1のような揺りかごを現に赤ちゃんの頭の形で悩んでいる日本の御家庭で採り入れることを考えてみてもよいと思います。前後のすき間から赤ちゃんを落とさない工夫や、つり下げる紐や棒の強度などいろいろと試みなければなりません。一つの可能性としては考えられるでしょう。



このように、子供の問題を考えると、ごくまだ最初の赤ちゃんの段階までも、私達がヤミ族に学べることが随分あるのに気がつきます。私自身がまだ一才半にしかならない子供を一人持っただけの母親なものですから、自分にとって身近な問題にどうしても目がいつ

しまいました。しかし、それなりの問題意識を持って見れば、三才の子の保育についても、何か教えられることがあるように思われます。

児童学や保育学、助産学などを学ぶ若い方々には、飢えや戦争で苦しむアジア、アフリカの子供達のためにボランティア活動をなさる心優しい友が数多いのは耳にしている所です。その方々が、彼の地での活動に入られる際に、「与える」だけでなく、「与えられる」可能性についても心の準備をしていって下さればと、拙文をしたためた次第です。

(お茶の水女子大学 人間文化研究科)